

イラクで見栄を張った話

情報通信課長 中前 隆博

私の直近の在外赴任地イラクでの経験をもとに、小噺のようなものをいくつかご紹介させていただきます（登場人物の役職は全て当時のものです）。

【ドレスコード】

現在、バグダッドの日本大使館はインターナショナル・ゾーン（IZ、通称グリーン・ゾーン）内の施設に全館員を収容し構えています。私が赴任した当初は、大使館の本館は市街地にあり、私は IZ 内にある「別館」の担当で、ひとりで灯台守のような生活をしていました。米、英をはじめとする「同盟国」の大使館や国連のミッションなどは IZ の中にありましたので、私の仕事はこれらとの日頃のリエゾンを務めることでした。従って、これらの大使館での各種行事にも、本館におられる我が大使の代理で出席することがしばしばありました。

10 月のある日、アスキス英国大使の秘書からメールが届き、11 月 30 日に聖アンドリュース祭のパーティーを開催するので招待したいとのこと。聖アンドリュースはスコットランドの守護聖人で、アスキス大使はスコットランド出身とも聞いておらず、なぜ取り立ててこの日を祝うのか、そのときはちょっと腑に落ちませんでした。しかし、日頃レトルトカレーや米大使館の食堂などで凌ぐ腹には、この手のお誘いは何よりと、二つ返事でお受けしたのです。

その後、用務帰国で東京にいた私のところへ、聖アンドリュース祭レセプションの招待状がメールに添付されて届いたのですが、これを見て目を疑いました。

ドレスコードが「ブラック・タイ」と指定されていたのです。

当時のバグダッドに貸衣装屋があるはずもなく、スペイン語サービスの私は入省以来ブラック・タイなどは縁のない職業人生でしたので持ち合わせもありません。そもそもクウェートからバグダッドへは、身ぐるみに荷一つで C-130 輸送機と米軍のブラックホークを乗り次いで赴任するわけで、礼服を携行することなど考えられず、軍の支援で大規模なロジ体制の敷ける米や英などの外交官にのみ許される特権でしかありません。現地の外交団がブラック・タイなどバグダッドに持ち込めないだろうことを見越した、悪い冗談か、挑発とさえ思われました。

しかし、今さら出席を取り消すのも、いかにも癪です。たまたま東京にいたのを幸いに、持って行くことにしました。

百貨店で一番安いタキシードとシャツや腹巻、ボタンなど、店員に教わるままに一通り買い揃え、着付けの手引書ももらって、自宅で一度予行演習をして、帰任の荷物に加えました。くれぐれも皺にならぬようタキシードは防弾チョッキの上から抱えて C-130 に乗り、余計な荷物を何より嫌う米兵の白眼視を無視して、バグダッド空港から IZ までのヘリに乗せてもらいました。

いよいよ当日、新調のタキシードに身を固め英国大使館に乗り込みましたが、会場に着いてみれば豈図らんや、ブラックタイに身を固めた御仁はごく一部で、大多数は思い思いの衣装で着ておりました。米国人も、大使等ごく一部を除き殆どはダークスーツか、あるいは職場からそのまま来た風な格好の人もいました。さすがに軍人には日頃の迷彩色の戦闘服ではなく軍礼服を着こなしている高官もいましたが、かなり目立つことになってしまった私は、招待状の指定を真に受けたことを後悔しましたが時すでに遅し。アスキス大使は挨拶で、「スコットランドは国の北部、山岳地帯にして風光明媚、その住民は高貴にして質実の気風を持ち…」とスコットランドを持ち上げたかと思うと、「クルド地方はまさにイラクのスコットランドである」としてひとしきりクルド地方の賛辞を述べたのです。

なるほど、今日のパーティーはバルハム・サーレハ副首相の出身地へのオマージュだったというのがよく分ったわけです。サーレハ副首相は亡命時代にクルド愛国者同盟党の在ロンドン代表を務めた人で、副首相である当時から流暢な英語を駆使し政府のスポークスマンとしても活躍していました。アスキス大使とは亡命時代からの友人であった由で、英国にとってはイラク政権に持つ最大の人的資産といえましょう。亡命時代に相当着こなしていたのかブラックタイが決まっているサーレハ副首相は御満悦この上ない表情でありましたが、あるいはこのドレスコードも、茶目っ気あるサーレハ副首相のリクエストなのかもしれません。これに付き合わされたにしては、エラく高くついたな、と思わずにはいられない私でした。あと何回着てもらえるかわからないまま、そのタキシードは我が家の押入れにつり下がっています。

【寿司バー】

バグダッドにあっても、「食の外交」の例外ではありません。

大きなロジスティクス手段と警備手段を持つ米国や英国の大使館は、国祭日や要人の訪問などの折には大々的に会食やレセプションを開催します。英大の例は既述のとおり。またイタリア大使館は本館が市街地にあるため IZ 内の施設は質素でしたが、それでも大きな石窯を構え、警備担当の兵士が焼いて振舞ってくれるピザが美味しく、案内があれば必ず押しかけたものです。

当時 IZ 内の大使館分館は、私一人で起居していて料理人も手伝いもいません。IZ は外界から隔離された、長崎の出島のようなところで、内にはコンビニはもちろん、八百屋も肉屋も、いわんや魚屋などありません。したがって設宴といっても和食は望むべくもありません。惜しくも日本通の海兵隊中尉殿に依ってあげられなかったリクエストは「ツキミソバ」。蕎麦と乾燥ネギは持ってきていましたが、生で使える卵がありません。

アメリカ人にはちょっとイジワルな人がいて、筆者が赴任の挨拶に回ったときに、「それで、お家でスシ・パーティーはいつやるの？」とニヤニヤしながら聞いてきます。

平成 18 年 8 月、麻生外務大臣がバグダッドを訪問しましたが、その準備の段階で、ハリルザード米大使と会談を行う話がもち上がりました。結局先方の都合がつかず会談は実施しなかったのですが、会談の準備を米国大使館と打ち合わせていた時、先方が「会談の議題その一は、なぜバグダッドに寿司バーがないのか、これでいこう」と言ってきました。

ヤツらに一泡吹かせてやりたい。

かくして日本のソフトパワー外交の危機を感じた私は、バグダッド寿司バー創業事業にとりかかりました。目標は、「せめてコンビニ寿司のレベルを」。

ヨルダンに立ち寄った際、加藤大使にこの計画を明かしたところ、大使は「止めておいたほうがいい」と、あくまで優しく諭してくださいました。大使には申し訳ないのですが、私の中ではこれが逆作用を起こしてしまったようです。

まず、この話を聞いた父が、取材と称して馴染みの寿司屋に通い詰めました。ねばり強い諜報活動の結果、ついにこの寿司屋の主人は、実は市販の粉末すし酢をつかうと握りにも使える結構おいしいシャリができること白状したのです。

ネタは、寿司屋の助言をもとにいろいろ試行錯誤しました。

刺身は論外なので、何とか保存食で品数をそろえなければなりません。ツナマヨやオイルサーディンは、私は好物なのですが、どうせ米国の友人から安易であるとなじられそうなので、検討からはずしました。ウニも何とかしたかったのですが、瓶詰めはあまりに塩辛いので諦めました。

結局、日本のスーパーで、アワビの姿煮とタラバガニの缶詰を買い、ドバイ空港の免税店でキャビア（これが最も財布にこたえました）、イクラ、スモークサーモンを買って、これらをピクニック用のクーラーバッグに保冷剤とともに詰め込んでバグダッドに持ち込みました。他に海苔と粉ワサビ、醤油、ガリ、それに特別にコシヒカリを2kg 持っていきました（重かった）。そのころバグダッドでは外気温が40度を超えており、途中で保冷剤が融けてしまわないかと、外は暑いが肝は冷えひえの移送オペレーションでありました。また、このときも米軍ヘリの兵隊さんには冷たい視線を浴び、これも大いに冷却効果がありました。

シャリ玉は、回転寿司屋が使うような機械を持っていくわけにも行かないので、プラスチック製の型容器を持っていきました。

以上の結果、握りと軍艦巻き合計60貫による「戦後バグダッドの寿司バー第1号」を実現し、招客に振舞うことができました。

米大の友人は、例によって「どうしてチグリズ川の鯉を使わないんだ」などとイジワルをしてくれるのですが、彼らも、毎日プラスチックの食器でアメリカ風の食事に漬かっているものだから、最後には「あー、今日は文化的な晩だったあ」と白状しながら帰っていきました。

思わず胸の内でガッツポーズです。

イラク人の友人は、人に会うたびに「こいつと仲良くしておけばキャビアのスシが食えるぞ」と紹介してくれました。キャビアはちょっと「持続可能性」に懸念を持っていたので、これには嬉しいながら少し困りました。

アル・ジュマイリ在京イラク大使は頭脳明晰で負けず嫌いの方でしたが、筆者が寿司の並んだ写真を見せたとき、とっさに「なるほど、たいしたものだが、この写真の場所がバグダッドであるとの証拠がない。」と応じました。

しかし、この写真を目にした同大使の表情に一瞬悔しそうな表情がよぎったのを、私は見逃していません。

(この話は、帰朝後提出した在勤報告の末尾に余談として入れたものですが、提出先の各位からはもっぱらこの部分のみ褒めて頂いたので、再掲載するものです)

【単騎突入】

某日、私は警備員の運転する車でアドナーン・パレスに向かいました。IZのはずれにあるアドナーン・パレスは現代的な意匠を凝らした壮大な建物で、財務大臣がオフィスを構えています。実はもともと内務大臣の執務所でしたが、内閣改造で蔵相に横滑りしたバキール・ジャブル内務大臣が、この場所が気に入ったと言って居座ったため、内務省がそのまま財務省になってしまったものです。ちなみにこのジャブル蔵相は、マーリキー政権シーア派の有力者で、政治的野心も持った大物政治家です。フセイン時代はイランに亡命して政治活動を行っていたとのことで、私も大使のお供で何度か御一緒させていただきましたが、体格は小柄ながら周囲を威圧する風格をもつ方でした。

当時日本はイラクに対して総額 35 億ドルの円借款の供与を表明し、既にいくつかの案件について E/N の署名を終えていました。イラクでは、フセイン政権の崩壊後亡命者を中心に新政権が成立しましたが、官僚手続きはかなり成熟した伝統を引き継いでいます。首相のひと声で手続は無視、というわけにはいきません。署名した円借款の E/N も、議会の批准を得る必要があります、またその前に法制局の審査を経る必要があります。ただ、イラクにとって円借款は 1990 年の経済制裁以来実績がなく、ましてや新政権の人たちにとってはまるで初めての経験です。法制局の審査なるものも、2 ヶ月経ち、3 ヶ月を過ぎてても全くなしのつづてで見通しが立ちません。

その日の私のミッションは、財務省にアジズ・ジャアファル大臣顧問を訪ね、審査手続きの状況につき情報収集するとともに、その迅速化に向け引き続き働きかけを要請する、というものでした。

建物に着くまでにいくつもの検問所があり、そこにも、周囲の塀や屋根の上にも、カラシニコフを持った「兵士」が大勢います。皆制服を着ていますがシーア派の民兵出身だろうと察しがつきます。居所の武装の程度も、その主の政治力を測るバロメータになります。私が車中から手を振ると、彼らにもこやかに手を振ってきます。

アジズ・ジャアファル顧問とは何度も会ってきましたので、「勝手知ったる他人の家」で、守衛に用向きを告げ、さっさと待合室に入って待っていると、スタッフが迎えに来ます。ここまではいつもと同じです。

ところが今回、スタッフは顧問の執務室を素通りし、奥へ奥へと私を案内します。行き着いた先は、かつて大使と来たことのある、ジャブル大臣執務室のドアです。一瞬「大臣不在中の執務室を使って打ち合わせかな」とも思いましたが、そうではないことはやがてわかりました。

荘重な仕草で扉が開くと、正面には幹部を従えたジャブル蔵相がこやかに私を迎えようとしているのです。

訳のわからぬまま入っていく。蔵相との握手。カメラのストロボが光る。大臣に促されて独り長椅子に座り、ジャブル蔵相は中央の安楽椅子に悠然と着座します。またストロボの嵐。

先方は財務省幹部が5名もいたでしょうか。当方は当然私ひとり。アジズ・ジャアファル顧問は、何故かこの場にいません。

力いっぱい想像力を働かせましたが、わかりません。円借の謝意表明？新規案件要請？それにしても大げさすぎる。もしかして10億ドルくらい裏金で出せ、と？しかしどうして大使と談判しないんだ。オレには何の権限もないぞ。拉致？イヤまさか。ここは政府だ。そんなことをするはずがない。一体ナンなんだこれは。

カメラマンが去り、コーヒーが供されたところで、ジャブル大臣は、いつもの流暢な英語で朗々と語り始めました。

「来訪を歓迎する。我が国と貴国は伝統的に友好的な関係を維持しているが、新政権においても良好な協力関係が維持されており極めて欣快に思う。貴国はアジアの大国であり、我が国は貴国との友好関係を戦略的に極めて重視している。今後とも両国関係が一層強化されることを願っている。近々私自身、中国を訪問したいと思っており…」

やっとわかりました。ジャブル大臣は中国大使の表敬を受ける予定が、スタッフが間違えて別の控え室にいた私を引きあわせてしまったのです。

さて、どうでしょうか。最後まで中国大使を演じて情報を頂いてしまう器量はないし、大臣の発言を遮って退出する度胸もない。

仕方がないので、大臣の発言が一通り終わり発言を促されたのをまって、私は正直に素性を明かし、何かの間違いでここに案内されたらしいことを説明した上で、しかし折角ですからと前置きして、円借款の進捗状況、E/N審査の迅速化について協力要請、我が国の円借プロジェクトにかける思いなどを一通り説明し、貴重な時間を頂いたことを謝して辞を乞いました。

ジャブル蔵相は、最初こそ鳩に豆鉄砲の面持ちでしたが、その後は寛容に私の発言を聞き、円借款に対する謝意を表明し、門司大使への挨拶を託して、許していただきました。

冷や汗をかきましたが、その晩の報告電作成が大変楽しい作業であったことは、お察しの通りです。